東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

A Study on the Practical Effects of Parent Support and Their Children in Multilingual Storytelling Activities at Local Japanese Support Classrooms

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-03-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 江口,典子, 許,夏玲
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173604

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　73：655－665, 2022

日本語支援教室での保護者支援と多言語読み聞かせの活動の可能性

江　口　典　子*1・許　　夏　玲*2

留学生センター

（2021年9月13日受理）

1　はじめに

外国人移住者の増加に伴い，日本語支援の場も多様化しているが，学童期（６才～12才）の子どもを抱える家庭向けの日本語教室や保護者が必要な日本語を学べる環境はまだ整っていないと言える。学童期の子どもを持つ親は学校行事への参加など，多くの人との連携が必要な時期にもあたる。子育てにおいては，精神的な負担も多く，異国での生活に加えての日本語学習は更に負担が増すことは言うまでもない。日本に滞在しているが，就労や就学の予定のない外国人生活者にとって日本語はそれほど必要に迫られていないようにも感じられる。しかし，日本の公立学校に子どもを通わせようと考えている場合や，長期的に家族と日本で暮らしていくためには，公共サービスに関わることも増え，日本語が不可欠になる。昨今，多言語対応やグローバルな社会のための準備は進められているが，学校教育や医療，福祉の領域ではグローバルな対応が十分であるとは言えない。就労や就学の予定がないとしても，日本の社会と関わっていくためには日本語が必要であり，身につけるべき言語なのであるとも言える。

しかし，上述の理由と考えられる学習動機が低い保護者に対しては，日本語学習を支援していくことは容易なことではない。保護者と一括りにしても，保護者の国籍，学習歴，文化背景など様々である。しかし，保護者の背景を問わず，一般的に親が我が子の教育に関わりたいと望むことは多いと考えられる。異言語環境で引き起こされる教育の問題として，現地の言葉ができないことで，教育に関わることが難しくなり，また仕事や子育てが忙しい中で子どもの教育に関心を持つ余裕がなくなることや，子どもの学校での様子がわからないことから生じる親子間のコミュニケーションの減少などが挙げられる。日本に住む外国人家庭にも同様のことが言え，日本語が話せない，理解できないということで学校行事への積極的な参加が減り，子どもの学習に関与できないということが予想される。

様々な事情により，保護者自身の日本語学習は疎かになりがちな上に，言語形成期にある子どもたちは自分の母語を忘れてしまったり，十分に身に付けられなかったりしていることはあまり知られておらず，保護者もそのことに気づけていない場合もある。日常生活において，日本語の指導ばかりに目がいき，母語に対して何もしないままでいることが，子どもたちが母語に対し無関心になってしまうことにも繋がる。親との絆である「母語」を失くしてしまうのは，アイデンティティや精神的発達など多くの面から不利な状況になりやすいとされる。

教育に参加したくても参加できない保護者や子どもたちの母語を守るためにも，子どもに関わる人たちで日本語と母語の両方の支援を進めていくべきである。学校教育が始まった児童の日々は忙しく，日本語学習の時間の確保だけでも大変な状況の中で，母語の支援も行うことは更に難しさが増す。このようなことから，日本語支援の場で親子の日本語学習を支援しながら，母語の支援との両立を目指すための試みとして多言語読み聞かせの実践と考察を行った。

２．本研究の目的

本研究では，多言語での読み聞かせ活動を通して，

＊１　東京学芸大学大学院 教育学研究科
＊２　東京学芸大学 留学生センター（184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1）

日本語支援教室の場で母語継承語教育を意識しつつ日本語学習を促すことへの可能性を探り，日本で暮らす外国人家庭の日本語学習と継承語支援に貢献できる取り組みの提案を行う。はじめに，読み聞かせ活動の準備として，保護者にも絵本を使用して日本語学習を支援する。その後，読み聞かせ活動を通して日本語と母語の両立を目指した学習への取り組みを地域支援の場で行うことの意義も伝え，学習者と支援者に国際理解を促していく。多言語読み聞かせ活動を通して，参加者がそれぞれの役割の中でどのような変化があるのかを追っていくものとする。

本研究の実践フィールドである小金井国際支援協会は2019年に立ち上げたばかりの団体であり，会員の学習者も中国語母語話者とタイ語母語話者兼英語話者と少人数である。３言語であれば絵本や読む順番などをコントロールしやすい環境であるとも言え，会員数も少なく，多言語読み聞かせの実践環境としては行いやすいところで協力してもらうことができた。

３．先行研究

先行研究では多言語読み聞かせ活動について紹介し，図書館活動，多文化共生を目指す活動としてだけでなく，日本語支援教室でも活用できる活動であることを明らかにする。また絵本を日本語学習として使用している実践研究で挙げられた語彙や意味理解に関する問題も，多言語読み聞かせであれば，言葉への負担を軽減することもできる。聞き手である子どもにとっては母語の絵本を聞くことや文字を見ることで，継承語教育としての意識を高めることに繋がることや，日本における多言語教育の重要性について検証する。

３．１　多言語読み聞かせ活動とは

母語を維持しながら，第二言語としての日本語にも触れてもらう機会を作るということで「多言語読み聞かせ」に注目した。多言語読み聞かせの活動は主に図書館が主導で行うことが多く，浜口（2020）では図書館での多言語読み聞かせの実践について詳しく書かれている。本研究で参考にした団体，「多言語絵本の会RAINBOW」と「ブッククラブえほんだな！」も図書館での活動を中心に行っている。その他「イクリスせたがや」では，地域の多文化共生を目指して多言語絵本の読み聞かせを実施している。今回はこの３団体の代表からのインタビューと「ブッククラブえほんだな！」での実際の活動を見学した上で実践を行った。どの団体も日本語教育の現場での活動ではなく，図書館の活動や地域の読み聞かせグループでの活動であったが，親子との関わり，本の読み聞かせ方法など参考にするべきところは多く見られた。「多言語絵本の会RAINBOW」は2006年より多言語での読み聞かせを実施しており，図書館や小学校などでも活動を広げ，オンラインでもオリジナルの多言語絵本を提供しているほか，DVD化したものを，全国の公共図書館に寄贈している。「ブッククラブえほんだな！」や「イクリスせたがや」の団体は世田谷区を中心に長期かつ継続的な活動を続けている。「ブッククラブえほんだな！」主催の「世界のことばで読み聞かせ」を見学した際には，言語や作品によって読み方を工夫するなど詳しく教えてもらうことができた。「イクリスせたがや」では多言語読み聞かせを「親と子どもの多様性に寛容な心を養うこと」，「国際家族が母語や文化を継承しやすい環境を作ること」という理念のもと実施しており，本研究の目的とも共通している。このように，多言語読み聞かせはすでに様々な場面でしっかりとした活動として広がっており，日本語教育という側面からも応用していくこともできると言える。

本研究で行う具体的な多言語での読み聞かせの方法としては，日本語と外国語の同じ絵本を，１行ずつ日本語と外国語の交互に読んでいく読み聞かせ手法である。上述した３団体は国際理解や多文化共生の面からも多言語読み聞かせ活動を推進しており，外国語話者の確保の仕方は団体によって様々である。本研究は外国語話者を研究対象である保護者が行うことで，継承語教育へと繋げていこうという取り組みでもある。また，本研究は地域との繋がりも重視し，公共図書館で借りられる図書を使用した。これは「ブッククラブえほんだな！」での活動を参考にし，もう一度読み聞かせしたいと思った時に近くで借りられるという親近感を示すことも可能になるという観点から採用することにした。

３．２　絵本の使用と日本語教育

絵本を日本語教育に取り入れた活動として多読や大学での授業などがある。絵本の使用であっても中・上級日本語学習者を対象としたものが多く，簡単な文章ではあるものの，物語の楽しさを感じ，語り合えるようになるためには，ある程度の日本語力が必要とされる。またオノマトペや日本語独特の表現や語彙の難易度の問題から読解の理解を妨げていることも指摘されている。渡邊（2016）では，絵本の多読における読みにくさについて分析されており，内容に共感できるか，ストーリーの単純明快さ，語彙（擬音語・擬態語の多

寡）などが読みやすさや，内容理解に影響していることが指摘されている。しかし，多言語絵本の使用であれば，母語での翻訳を読むことができるため，語彙やオノマトペなど簡単なものであれば理解の妨げをすることなく読み進めることができる。また，母語での読み聞かせを練習することが中心になるため，日本語学習ということを意識しすぎることなく，学習者の情意フィルターを低くするのに有効に作用させることもできる。

３．３　継承語教育との繋がり

児童の第二言語習得に関する文献において，継承語や母語の重要性を訴えるものは多い。日本での生活の中で子どもたちはマジョリティ言語である日本語の会話力をあっという間に身につけると同時に，いかに早く母語を失うか，十分身につけられなくなってしまうことはあまり知られてないことも指摘されており（真嶋2019），母語の維持の難しさについてもっと周知されるべきである。また，親とのコミュニケーションには「母語」は不可欠であり，アイデンティティや精神的発達にも母語が大きく影響することは明らかになっており，日常の使用言語である日本語を習得することに夢中になる余り，母語を失うことは大きなリスクを抱えてしまうことになる。

日本のような多言語教育が進んでいない国で，外国人生活者に対し，日本語だけでなく，母語の習得の支援を訴えることはとても難しいことのように考えられるが，これからの社会にも第二言語とその文化を習得する過程で，第一言語と母文化が失われてしまうような「減算的バイリンガル」ではなく，第一言語と母文化を失うことなく，第二言語とその文化を育む「加算的バイリンガル」の育成が必要であり，子どもの母語と日本語を合わせ，包括的に支援していくことが必要とされている。久保田（2019）では，従来の日本の教育に見られる多言語教育軽視を指摘し，言語や文化の多様性および継承語学習の意義を確認していくことの重要性も主張されている。日本の学校教育の中では多言語環境を体験することは難しいが，日本語支援教室の多言語環境の中では，多言語を認める支援者も多い。保護者により積極的に関わってもらうことで，恵まれた多言語環境を上手く活かしながら継承語学習へ繋げることも可能になる。地域の日本語支援の場から真のグローバル人材の育成も可能になるのではないかとも考えられる。多言語環境の中で，読み聞かせを通して，日本語の学習と母語に触れることや，親子のコミュニケーションの機会を増やし，複数の言語に触れることで，関わる人たちのそれぞれの成長に貢献できる可能性を探るべく実践を行った。

４．実践研究を始めるにあたって

地域の日本語学習支援を行っている小金井国際支援協会では月に１回学習支援が行われている。学習支援会の参加は児童の場合，保護者の送り迎えが条件になっている。１時間半という学習時間の中で，児童を預けて買い物等に出る保護者もいるが，１時間半と短い時間なので保護者も一緒に勉強できないかと考えた。保護者としては日本語文法を学ぶというような日本語学習ではなく，支援者となる日本人とのコミュニケーションを中心とした学習を想定したが，日本語力が十分でない保護者と日本語しか話せない支援者と雑談を弾ませるのは難しく，回数を重ねるごとに会話も弾まなくなってしまう。そこで，児童を含めた多くの人々とコミュニケーションが弾むような機会や文字を使用した活動として多言語読み聞かせを行った。

４．１　保護者支援と継承語教育がもたらす効果

日本語学習にあまり積極的でない保護者層でも，自分の子どもの学習に協力するという目的であれば積極的になってくれる場合が多い。多言語読み聞かせ活動は日本語と学習者の母語とで行うため，読み手として保護者の参加は不可欠になる。また，読み合わせの際に日本語に触れることや，読み合わせを通して内容理解を行っていく過程には，日本語でのコミュニケーションが必要になることから，日本語学習にも繋げることもでき，学習の動機づけとしても適している。

実際，読み聞かせの活動をしてみると，真剣に本を見比べる子どもの表情を間近で見ることができ，読み聞かせを楽しんでいる様子がうかがえる。保護者が近くにいる安心感や，隣で学習する保護者を見ることは子どもにとってプラスの影響があることは真嶋(2019)などでも述べられている。また，日本語支援の現場であれば，支援者に多言語話者も多く，簡単なコミュニケーションであれば母語で会話ができる場合もある。子どもの送り迎えだけに，学習支援教室を利用するのではなく，自身の学習や地域を知るという意味でも，積極的な参加が期待される。

継承語教育を支えていくことで，外国人生活者の日本語学習にも貢献できる可能性があるというのは上述した通りである。日本語文法を学ぶような従来型の日本語学習にはならないが，日本の絵本を母語と日本語の両方の言語で学ぶことは，言葉を通して文化の違

い，表現の仕方の違いなどに気づくことや，絵本から得られる話題がコミュニケーションのきっかけにもなる。本研究には中国語母語話者とタイ語母語話者と英語母語話者の３名に協力者となってもらった。３名とも４年以上日本に滞在しており，日本語学習は主に独学で行ったという。そのため，正確な日本語レベルを判断することは難しいが，知っている言葉や文法にばらつきがある様子，ひらがなの読み書きレベルなどから，初級のN５とN４の中間レベル程度と想定される。しかし，日本語表現から翻訳の不自然さには気づくことができる様子も見られた。絵本で扱われるような簡単な会話のやり取りでは，文字だけでなく絵や翻訳からも情報を得ていることがうかがえた。インタビュー調査では，読み聞かせ活動を通して日本語も学習していると感じられるとの前向きな意見も得ることができた。語彙や表現においては日常生活の中にも見られるものもあり，絵本を通して日本語学習ができていると感じているのである。

また，読み聞かせの活動の準備は日本語でやり取りを行うため，自然と日本語の使用が必要とされる。日本語でのやり取りの機会を増やせば，コミュニケーションも促進できることが予想される。物語に関する感想を聞こうとするとどう表現していいか言葉が見つからず，わからないといった様子がうかがえた。しかし，わからない時に「そうですね」と言って「わかった」または「考えている」ように振る舞い，話題を変えていく様子も見られ，その場をやり過ごすタイミングなどは在日期間が長いことが影響するのか，とても上手に行えていた。

読み聞かせを始める前に準備のために本を一緒に読むことに加え，時間を共有する際の雑談から，生活での不安を聞くこともできる。実際にこの活動を通して，保護者がいかに子どもの日本での学習を心配しているかを知ることができた。また，出身国の話は積極的に行うことから，母語と日本語の比較や出身国について触れることで，母語に対する意識を高めることもできると考えられる。親の母語に対する意識を高めることが，子どもに母語の大切さを伝えることに影響させることも期待できる。

本の好きな子どもを育てるには，本に触れる機会を増やすこと，特に読み聞かせは有効な手段であると言われている。しかし，普段忙しい保護者が，読み聞かせを行うことは負担になると考えられる。また，読み聞かせは乳幼児期の活動であると考え，学童期には行っていない，または必要ないと考える保護者もいる。読み聞かせや読書に関し，様々な意見を持つ保護者がいる中で，日本語支援の活動の一環として，再度読み聞かせを提案することは，保護者の学習を支え，内省を促す側面もあると言える。継承語教育には親の協力が不可欠であり，保護者と一緒に取り組めるような環境づくりの提案も必要である。保護者が前向きに参加し，読み聞かせなどの活動を一緒に行うことで，子どもと親とのコミュニケーションを支え，親子の絆を一層強めることが期待される。日本語支援の場からもこのような機会を持ち，保護者を巻き込んだ学習を提案することも日本語に関わる意味のある活動であると言える。

４．２　絵本の選定について

今回多言語読み聞かせ活動の絵本は『くもんの読書ガイド2020』から多言語翻訳されているものを使用した。この読書ガイドは公文の読書指導のデータから，子どもたちに人気が高く，内容的にも優れている本を13段階にわけて紹介してある。日本の子どもに人気が高い本を読むことや，日本人の作家によって書かれた作品を読むことで，日本人の使用表現や考え方に触れ，自国の言語への翻訳の違和感などから生じる違いなどにも触れることができる。また，本は地域の図書館で借りられるもので実施していくことで，本に対する身近さも体験してもらう。小金井市の公共図書館には翻訳絵本の蔵書は少ないが，東京都民であれば新宿区の公共図書館が利用できる。また西東京市の公共図書館でも多言語絵本の蔵書が多数見つかった。西東京市の図書館の利用は西東京市民だけでなく，近隣の清瀬市・小平市・東久留米市・東村山市・小金井市・三鷹市・武蔵野市・練馬区・新座市在住でも借りることができ，小金井市の活動にも貢献することができる。絵本は主にオンラインで予約をするため，日本語の絵本と外国語の絵本が別々の場所の図書館にあっても，同一図書館で受け取ることも可能になっており，気軽に借りることができる。

今回の実施した絵本は以下の通りである。

【１回目（2021年2月10日）】
参加者：児童3名，保護者1名，支援者6名
本のタイトル：
『わにさんどきっ　はいしゃさんどきっ』（1984）
『鰐魚怕怕　牙医怕怕』（中国語）（2008）
【２回目（2021年3月10日）】
参加者：児童5名，保護者2名，支援者10名，
　　見学者6名
本のタイトル：
『わたしのワンピース』（1969）

『我的连衣裙』（中国語）（2008）
【３回目（2021年4月14日）】
参加者：児童５名，保護者２名，支援者11名
本のタイトル：
『ぐりとぐら』（1963）
『กุริกบักุระ』（タイ語）（1995）
【４回目（2021年8月26日）】
参加者：児童２名，保護者１名，支援者６名
本のタイトル：
『だるまちゃんとてんぐちゃん』（1967）
『Little Daruma and Little Tengu』（英語）（2002）

５．多言語読み聞かせ活動の実践について

多言語での読み聞かせは，活動として定着させるまでは長く時間がかかると言える。しかし，子どもにとっては母語や日本語以外の外国語を意識する機会となり，保護者にとっては日本語学習に関わるきっかけと子どもとの新しいコミュニケーションになるとも言える。支援者は日本語学習として感じてもらうため，絵本を通して日本語教育に繋げていく工夫，例えば，絵や語彙などの意味理解や，物語の楽しさを理解しておく必要がある。本研究で使用した絵本は日本人の作家によって書かれているものを選んだ。そのため，オノマトペや韻を踏むような表現を含むものもあり，面白さが伝わりにくいこともあるが，翻訳を読みながら表現の違いなどの気づきを得ることができる。また，日本語でコミュニケーションを取りながら，一緒に活動を支えていくことで，子どもの教育に参加し，自分自身の日本語学習に少しでも貢献できるものになるよう導いていくことも，地域の日本語教育活動として大切なことである。

５．１　実践の様子から見えてきたこと

多言語読み聞かせという活動がどのようなものか周知できていなかったため，実際に行うまで，予想ができないことが多く，席の配置や読み聞かせの進め方などは毎回変えていた。しかし，読み聞かせが始まると，学習者がわからない言葉であっても，日本語に耳を傾けたり，絵から内容を理解しようとしたり，それぞれの得意な情報から内容を理解する様子がうかがえた。子どもの視線は一冊の本に集中するというより，交互に見比べるような動きが多々見られた。また，学習支援中に保護者が同じ空間にいることで，子どものモチベーションは上がり，保護者に学習の進捗を報告することや，ちょっとしたコミュニケーションを楽しむ様子も見られた。

１回目の活動では支援者，学習者全員が興味津々で参加してくれた。この日の参加者は大人10名，児童３名であった。１回目は保護者も日本で行うような読み聞かせの行い方に戸惑い，本を自分に向けたまま読もうとして，子どもに本を向ける向きを指摘されていた。読み聞かせの行い方も，集団と家庭内では違いがあることも考慮に入れておくべきであった。この日の参加の３名の児童は兄弟で地元の公立小学校に通っており，大人が絵本を持って準備している段階から，読み聞かせが始まることを察しているようであった。自分の学習が終わると，大人の向かい側に座って待っていた様子から，読み聞かせの経験があることもうかがえた。初回ということもあり，子どもより読み手である大人の方が緊張している様子も感じられた。

２回目は前回と同様の読み手で行った。参加者は大人18名，児童５名だった。この日はタイ語英語母語話者の児童が２名と中国語母語話者の児童が３名となっており，タイ語英語母語話者の児童は日本語の絵本に近い所に座ってもらう工夫を行った。読み聞かせの最中は日本語の絵本の方を見ていたが，時折，中国語の絵本を見る様子もうかがえた。中国語母語話者の児童とほぼ同じような動きが見られ，理解していない言語であっても，興味を引くことができることが明らかになった。読み手の中国語母語話者の保護者は前回より大きな声で読み聞かせることや，オノマトペのところは中国語に合わせたリズムで読んでもらうなどの独自の工夫も見られた。中国語がわかる支援者は前回との翻訳の違いに注目し，絵本の翻訳には直訳的なものと意訳的なものがあることなどの意見も寄せられた。

３回目はタイ語翻訳の絵本で読み聞かせを行った。３回目からは母語と日本語により意識を向けるために，言語の違いや，絵本の内容についての質問も行った。この日の参加者は大人13名，児童５名で２回目と同様，中国語母語話者の児童３名とタイ語英語母語話者の児童２名であった。支援者の中にタイ語がわかる人はいなかったが，タイ語の表現を観察し，タイ語に興味を持ったことがアンケートの回答からもうかがえた。中国語母語話者の児童はタイ語のシャドーイングを行うなど，楽しんでいる様子もうかがえた。絵本の内容についての質問に関しては，身振り手振りで回答しようとしたり，「くるま」という回答を聞いたのちに，復唱したり，児童が読み聞かせによって日本語が学習できていること，母語や外国語に対して前向きにとらえている様子から，多言語での読み聞かせの活動の楽しさなども伝えることができると感じた。

５月からは東京都の緊急事態宣言の影響で公民館が閉鎖となり，学習支援会自体が開催できなくなってしまったが，８月は公民館でなく，社会福祉協議会の会議室を使用し，夏休み宿題応援会を開催した。

４回目は英語の絵本で読み聞かせを行った。この日の読み手は男性の支援者と英語母語話者の父親で行ってもらった。参加者は支援者６名，保護者１名，児童２名であった。英語母語話者の父親は毎晩英語の本を読み聞かせているとの話であったが，多くの人の前で父親が読み聞かせを行うことで，娘である児童は嬉しさが隠し切れないほどの笑みを見せていた。子どもにとって保護者の参加が良い影響をもたらすことが明らかになったとも言える。また協力者の父親は会の参加が初めてだったこともあり，支援者と関わる機会を持つこともできた。お互いを知ることで，安心感や親近感も持つことができ，信頼関係の構築も多言語読み聞かせ活動が担うこともできたと言える。

３回の読み聞かせ活動の実践で徐々に慣れてきてきたころから，しばらく中断となってしまったが，その間にアンケートとインタビュー調査を行い，４回目の実践を迎えることもできた。４回目は少し長めの物語であったが，児童が楽しめている時や集中できない時などを含め，リラックスして自分たちのペースで楽しむ様子もうかがえた。

５．２　アンケート調査から見えてきたこと

参加児童からはアンケート調査が行えなかったが，参加保護者と参加支援者には１回目の活動前と３回目の活動後にアンケート調査を２回行った。参加保護者へのアンケートは真嶋（2019）のアンケート項目をもとに行った。１回目は読み聞かせ活動を行う前に行い，２回目は読み聞かせ活動が終わってから回答してもらった。どちらも回答時間は20～30分程度を要した。支援者へのアンケートは読み聞かせ活動が終了した直後に毎回実施した。読み聞かせ活動の後には他の文化活動もあるため，内容は感想を含め３問程度に留め，回答時間は５分程度で答えられるものにした。

両親が中国籍の家庭の場合では「家に子どもが読むような教科書以外の本があるか」という質問に対し，「はい」と答えたものの，あったのは日本語の本で，中国語の本はなかった。日本の本は購入する他にも学校の図書館で借りているという。しかし，２回目のアンケート時，家庭には中国語の本が確保されていた。また「子どもの言語能力についての希望」に関する質問では，１回目は中国語の学習が少し遅れても，日本語力を強化したいとの回答を得たが，２回目のアンケートでは中国語と日本語の両方を強化したいと変化していた。３回の活動で母語の大切さに意識がいくようになったと感じられる結果となった。１回目の調査では，中国語力を強化するために何が必要かという質問には，家庭での支援と１つの回答であったが，日本語力を強化するために何が必要かという質問には，学校での特別な指導や日本語の本を与えること，日本人との交流の機会を増やすことと複数回答し，保護者が日本語に対し期待を強く抱いていることがうかがえた。

タイ籍（母）とカナダ籍（父）の家庭の場合では父親が第二言語習得に対する関心があり，日本語の本は主に図書館で借りているが，子供が読む英語の本は100冊を超えるほどあり，またタイ語の本に関しても10冊程度はあるとの回答であった。英語と日本語の両方の言語能力を伸ばす努力を行っており，父親が毎晩読み聞かせを行っているという。タイ語に関しては母親の家族とコミュニケーションが取れればいいとの考えで，今タイ語を教えると子どもが３言語を同時に習得しようとすることになるため，混乱が起こるのではないかと心配もしているとの話もしてくれた。一方で，久しぶりにタイ語が聞けるため，娘は喜んでいるとも話してくれた。

２つの家庭からの調査ではあるが，母語をどのように教えていくかということは家庭によって違いがあり，児童が継承語として家庭だけで学習していくことは容易ではないことが明らかである。またアンケート調査からも活動の前と後で母語に対する関心に変化が見られることもわかってきた。外からの働きかけにより，継承語教育への関心を促すことの重要性も明らかにできた。日本語支援教室を利用する児童に向けて，継承語支援もしていくことの必要性が明らかになったとも言える。読み聞かせ活動後に，子どもの読書への関心は増したとの話もあった。読み聞かせを行うことで，親子のコミュニケーションが増えるということは４回の実践では実証を行わなかったが，母語を大切にしようとする気持ちには変化が表れたということがわかった。

５．３　保護者とのインタビューについて

アンケート調査を行った後，保護者に対して簡単なインタビューを実施した。主に読み聞かせ関連の質問や活動に関する感想を聞かせてもらうことができた。

中国籍家庭の母親とのインタビューでは，児童は読書が好きなので，読み聞かせの活動も好きということも話していたことから，活動について前向きな回答を得ることができた。３回の活動で子どもに変化があっ

たかという話では特に変化はないが，タイ語と日本語で行った『ぐりとぐら』は気に入ったようで，その後も『ぐりとぐら』の絵本を借りたり，YouTubeの読み聞かせ動画を見たりしているということがわかった。

読み聞かせの準備段階で，保護者は日本語学習として役に立っているかという質問には日本語学習になっていることも話してくれた。準備は主に日本語の絵本と母語の絵本を見比べながら意味理解を行うという簡単なものであるが，語彙は普段の生活でも使用する言葉が多く含まれており役に立っているとの話をしてくれた。

タイ国籍の母親とのインタビューでは家庭での読み聞かせの頻度について教えてもらった。こちらの児童も読書が好きで，家でも読書の習慣があることを教えてもらった。また，毎晩父親が英語の本の読み聞かせをしており，今では子どもが自分で短編の英語児童書も読んでいるという。

英語母語話者の父親とのインタビューでは，子どもの母親の母語であるタイ語の学習についても聞くことができた。タイ語は母親の母語であり，母親の家族とのコミュニケーションができる程度になってほしいと感じており，今後子どもたちが成長する中でタイ語に興味を持った時に気軽に取り組めるレベルは確保したいとの話であった。

子どもの言語に対する親の期待は家庭の中でも様々であることに加え，子どもの個性や成長によって変わっていくため，今は何とも言えないというのが今回のインタビューした３名に共通した回答でもあった。子どもの無限の可能性に対し，言語教育はどのように寄り添うべきか考えていくことも今後の課題であると言える。

５．４　支援者の感想について

今回の調査では支援者の継承語に対する心の変化もうかがい知ることができた。支援者へのアンケートは学習会の進行の都合と会場の使用時間の制限などもあり，長く時間を確保することができないことから，アンケートの内容は感想を中心に母語維持や継承語に関する簡単な質問に留めた。

多くの支援者が多言語読み聞かせ活動について前向きに感じていることを明らかにすることができた。活動についても今後も行ってほしいとの要望もあった。継承語という言葉の認知度は低く，80％の人がわからないと回答した。しかし，100％の人が外国籍児童の母語維持に関して，日本語と母語とどちらも並行して勉強して欲しいと考えていることもわかり，継承語という言葉は知らないが，母語を維持することの大切さに気づいていることが明らかになった。しかし，実際に母語維持の支援を行っている支援者は少なく，多言語読み聞かせ活動を行うことで少しでも継承語教育支援に貢献できると感じてもらえる。

活動を通して支援者の中に変化があったかとの質問には，70％の人が「変化があった」との回答を得ることができた。変化の内容としては，多言語で聞くことで多文化理解や言語理解ができるようになったという，母語だけでなく，外国語への関心や気づきに関する変化が見られた。また，子どもの絵本を熱心に見つめる姿を見て，シャドーイングなどの学習法を取り入れた改善策や日本語を教えるだけでなく，一緒に楽しめるような支援を行うというような，児童の学習支援に対する気づきも得られた。また，活動も４回目からは読み手になってもいいと考える支援者もおり，活動自体の継続に前向きである回答も得られた。

このように活動を通して支援者からも国際理解や指導法などに関する気づきを得てもらうことができ，より質の高い支援が今後も期待できると言える。日本語を指導するだけでなく，学習者の背景を理解していくことでメンタル面のサポートも行うことが可能になると言える。

６．多言語読み聞かせ活動の実施と今後の課題

実践の結果，多言語読み聞かせの活動は外国人保護者の日本語学習に貢献し，子どもの継承語としての母語支援にも貢献できる活動であると言える。また，支援者にとっても継承語教育の大切さや国際理解教育に触れる機会となってくれた。その他にも，地域の日本語支援の場は外国人と日本人が協働的に生きることのできる第一の場であると捉えることもできる。日本語を単なる文法構造の習得として考えるのではなく，言葉を使って，生き様を考える機会を与え，人，社会，環境との関係から生まれる生態的な価値を問うことを目的とする言語教育を実現することも可能であると考えられる。

尾辻（2016）では，グローバル化が進んだ後期の近代社会において，私たちの日常生活は，人，物，情報，思想，習慣，そして言葉の移動によって成り立っていることを指摘し，人々の日常を言語資源や言語レパートリーという観念で理解し，「言語」習得ではなくレパートリーを豊富にすることを目的とする言語教育理念も生まれているということを示唆している。多言語読み聞かせ活動を通して，相手の言葉に触れることで，

他者に対する理解を前向きに捉え，日本語支援の周りに学習者の母語の存在を理解できるのではないかと考えられる。細川（2016）では，言葉のレパートリーを駆使して協働的に生きることで，言葉の市民性が形成されるとも主張している。地域の日本語支援での人との関わりから個人の市民性が生まれ，協働的に生きる場も構築されていくことに繋がると期待される。

しかし，日本語支援教室での多言語読み聞かせ活動はまだ始めたばかりの活動であり，課題も多く残されている。まず，活動を継続的に行っていくために多くの本を探す必要があることや，今回は中国語，タイ語と英語で実践を行ったが，今後の参加者の状況により，外国語の本が見つからないことも想定される。読み手に関しても，支援者が日本語の絵本を読んでもいいと考えてもらえるようになったばかりで，支援者の負担度が少なく，活動として継続させていくためにどのような準備・周知が必要かが整理できていないところもある。親子対象の活動を進めながら，言語教育は子どもの成長と共にどのようにあるべきかも検討するべきであるとも言える。またこの活動を今後展開していくことに加え，日本語学習者が多様化している日本の現状をふまえ，地域の日本語教室への日本語専門員の配置の必須化なども検討されるべきである。

謝辞

本研究を実践するにあたり，ご協力頂いた小金井国際支援協会，多言語絵本の会 RAINBOW，ブッククラブえほんだな！，イクリスせたがやの皆様に深く感謝いたします。

参考文献

蒲谷宏・細川英雄（2012）『日本語ライブラリー日本語教育学序説』朝倉書店

鎌田修・嶋田和子・堤良一編（2015）『談話とプロフィシエンシー－その真の姿の探求と教育実践をめざして－』凡人社

カミンズ・ジム＆マルセル・ダネシ（2020）『新装版　カナダの継承語教育－多文化・多言語主義をめざして』明石書店

久保田竜子（2019）「日本における外国にルーツをもつ子どものための継承語教育と言語政策」『親と子をつなぐ継承語教育　日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版, pp.268-282

コリン・ベーカー（1996）『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店

中川智子・尾関史（2007）「絵本を活用して「ことばの力」を育む－地域日本語教室「わせだの森」における実践を通して－」『早稲田大学日本語教育実践研究』6，pp.3-12

中島和子（2017）「継承語ベースのマルチリテラシー教育：米国・カナダ・EUのこれまでの歩みと日本の現状」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』13, pp.1-32

中島和子（2010）『マルチリンガルへの招待－言語資源としての外国人・日本人年少者－』ひつじ書房

浜口美由紀（2020）「在留外国人との地域交流の可能性について－図書館での子どもへの多言語読み聞かせの実践を通して－」『純心人文研究』26，pp.89-104

細川英雄・尾辻恵美・マルチェラ・マリオッティ（2016）『市民性形成とことばの教育－母語・第二言語・外国語を超えて』くろしお出版

真嶋潤子（2019）『母語をなくさない日本語教育は可能か－定住二世児の二言語能力－』大阪大学出版会

山中恵美（2012）「ウェブ利用共同学習と語用論的気づき－米国の日本語学習と日本の英語学習者によるプロジェクト－」『第二言語習得と言語教育』，くろしお出版, pp.172-194

横山泰子（2017）「日本の絵本を非日本語で読む　2016：法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み」『法政大学小金井論集』13, pp.83-93

渡邊奈緒子（2016）「外国語学習における絵本多読の効果－絵本多読の経験がある学習者へのインタビュー－」『一橋大学国際教育センター紀要』7，pp.71-82

参考資料

イクリスせたがや　http://icris-setagaya.com/　2021/08/30

公文教育研究会（2020）『くもんの読書ガイド2020』

多言語絵本の会 RAINBOW
https://www.rainbow-ehon.com/ 2021/08/30

使用絵本

加古里子（1967）『だるまちゃんとてんぐちゃん』福音館書店

KAKO Satoshi (2003) (Translated by HOWLETT Peter and McNAMARA Richard)”Little Daruma and Little Tengu: A Japanese Children's Tale（『だるまちゃんとてんぐちゃん』英語版）”Tuttle Pub.

五味太郎（1984）『わにさんどきっ　はいしゃさんどきっ』偕成社

五味太郎 (2008) (上誼編輯部訳)“鰐魚怕怕　牙医怕怕（『わにさんどきっ　はいしゃさんどきっ』中国語版）”明天出版社

中川李枝子（1963）『ぐりとぐら』福音館書店

中川李枝子（1995）（พรอนงค์ นิยมค้า訳）”กุริกบักุระ（『ぐりとぐら』タイ語版）”Amarin Kids
西巻茅子（1969）『わたしのワンピース』こぐま社
西巻茅子（2008）（彭懿訳）“我的连衣裙（『わたしのワンピース』中国語版）”明天出版社

日本語支援教室での保護者支援と多言語読み聞かせの活動の可能性

A Study on the Practical Effects of Parent Support and Their Children in Multilingual Storytelling Activities at Local Japanese Support Classrooms

江　口　典　子・許　　夏　玲

EGUCHI Noriko＊1 and HUI Harling＊2

留学生センター

Abstract

The purpose of this study is to examine the potential effects of multilingual story telling activities which are conducted in the first language of the foreign parents and in Japanese language of the Japanese support staffs at the same time. The surveys and interviews of parents and staffs have been recorded since February 2021. The result of the study shows the activities promote an awareness to the heritage language education for children who have foreign language speaking parents, and help the progress of Japanese language education support for their parents. Meanwhile, the Japanese support staffs have also learned not only Japanese teaching in general, but also international cultural studies through the activities.

Keywords: Heritage language education, Japanese language education, Multilingual storytelling activities, Foreign residents support, International understanding

International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要　旨

本研究は日本語教育支援の現場で多言語での読み聞かせ活動を通して，親子での日本語学習の参与と継承語教育としての読み聞かせの可能性を探るものである。４回の実践とインタビュー，アンケート調査を通して，読み手である保護者，聞き手である児童，支援者の関与に対する心の変化を観察した。地域の日本語学習支援教室で多言語読み聞かせ活動を行うことによって，保護者には日本語学習の促進を図りつつ，継承語教育の必要性に気づいてもらうこと，児童には母語や外国語に触れる機会を作り，支援者には日本語を教えるだけでなく，国際理解教育への気づきを得られた。多言語読み聞かせ活動は学習者と支援者がお互いを理解し，活動を

＊1　The Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
＊2　Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)

通して互恵的関係を築きながら学ぶことができることを明らかにした。

キーワード：継承語教育，日本語教育，多言語読み聞かせ，在留外国人支援, 国際理解